

先日、テレビで1955年製作のキャサリーン・ヘップバーン主演の映画「旅情」を見た。舞台はイタリアのベネチアである。2014年、私は妻とベネチアを訪れた。その時の風景で映画の画面と大きく異なっていたのは、ベネチアのターミナル駅であるサンタ・ルチア駅に乗り入れる列車が蒸気機関車から電気機関車に変わったこと、サン・マルコ広場から鳩の群れがなくなったことぐらいであった。映画に現われる小さな水路や路地の様子は全く変わっていなかった。そのことがベネチアの路地を大きな迷路と見立てて通り抜けた試みを、思い出させた。迷路通り抜けを試みるまでの経緯を順に述べます。

I. 磁気コンパス（磁石）

1. 初めてのロンドンでの街歩き。バッキンガム宮殿からパディントン駅近くの宿へ歩いて帰るのに、視界が開放的なハイパーク内を1.5km斜め横断するのが分かり易いと考え、宮殿からパークに向った。途中、地図に誤りがあり、道に迷った。通りがかりの婦人に道を尋ね、パークに辿り着いた。妻の英語が役に立った。しかし英語の通じない国で道に迷ったらどうするかが気に掛かった。
 2. 初めてのミラノ。繁華街で買い物をし、地下鉄を乗り継いで宿に帰る予定であった。最初の地下鉄では先頭車両に乗るべきだったのに後方に乗り、人の流れに合わせて動いたら地上に出てしまった。地図で位置の確認はでき、歩いて帰る方角が分かったが、交差点のどの通りを進めば良いか分からない。しかし太陽が出ていて、自分の影で進むべき方角との関わりが分かり、通りの選択ができた。と同時に磁石の利用が頭に浮かんだ。以後の旅は磁石の携帯となった。
- 2回目のロンドン、コベントガーデン（東京なら浅草か？）では磁石のお世話になった。

II. ストライキ

迷路の試みの前々日、ミラノからの列車で日本人と通路を挟んで同列になった。彼はイタリアで料理修行中である。その会話でイタリアの鉄道の話となり、ストライキに留意することを示

唆された。私は前回のイタリアの旅では、交通機関にストライキの気配を全く感じなかったが。

III. 迷路への試みまでの幸運

1. 前々日の宿泊はフェラーラであった。この夜、教会が後援する若者たちの演奏会があった。会場は宿から近く、通行上の治安に問題がなさそうなので、覗いてみた。初めて聴く曲なのだが、ジリオラ・チンクエッティ（1970年ごろ）を思い出させる旋律が混じり、楽しく過ごした。また若者たちにカンツォーネが根付いていることが羨ましく思った。
2. 翌朝、駅に向うバスは通勤時間帯を過ぎていたのか、乗車は私たちだけであった。運転手から声がかかり、取り留めのない話を英語で交わした（交通、観光関係は英語が可）。下車の際、運転手は無料の仕草を示した。（イタリアのバス運転手に関しては喜劇が書けるような体験や苦虫を噛み潰した人など様々）「グラッチェ」と言って、よい気分でフェラーラ駅舎に入った。
3. が列車運行表示板を見たら驚いた。乗る予定の列車が運行休止。駅員に理由を聞くと、快速列車はストライキとのこと。次発の特急は満員で発券されない。次々発の特急にバラバラ席があり、旅が継がった。これにより途中のパドヴァ観光を止めざるを得なくなったが、ベネチアでの滞在時間を長くすることができた。
4. 宿はベネチア島の対岸のメストレ（メストレ・サルチア駅間は列車が頻発、所要は約10分）。荷物を宿に置き、サンタ・ルチア駅近くのヴァポレット（水上バス、路線網が充実）切符売り場へ向った。36時間券を求めたら、明日は水上バスがストライキで12時間券しか売れないとのことである。予定に大きな狂いが生じた。食事をしながら妻と、ベネチアでの行動計画を練った。当初、36時間券を活用すれば、気分しだいでも何処へでも行けるので詳細な計画を立てなかった。計画は次のようになった。この日は主に水上バスでベネチア本島以外の島々を巡る。翌日はサンタ・ルチア駅から観光客の多くが歩く大運河（ベネチア本島中央を逆S字に貫いている）東側を迂回する道を歩き、リアルト橋詰を経て、サン・マルコ寺院に向い、寺院とその周辺を観光する。
5. 島巡りには路線の乗り換えが必要で、不慣れなため大運河を一往復半してサン・ジョルジョ・マッ

ジョーレ島に着いた。島の教会の鐘楼からの眺めは周辺島々を含めたベネチア全体を俯瞰するものであって、想像以上に素晴らしかった。小説「ベニスに死す」の舞台のリド島、ガラス工房のムラーノ島を巡った。共同墓地であるサン・ミケーレ島を間近かに見た。ベネチア本島の北東側海沿には倉敷の旧繊維工場を思わせるレンガ造りの建物が多くあり、水上バス停留場で多くの労働者が帰宅のため乗込んできたことから、ベネチアは製造業も盛んだと思った。

6. 翌日、水上バスが動かないこともあってか、サン・マルコ寺院への道も寺院周辺も観光客で溢れていた。時間に余裕がありドゥカーレ宮殿など観光拠点の行列待ちも気にならず、またゆっくり見学ができた。昼食はゴンドラが行きかう水路脇のテラス席に座れ、食事と共にベネチアらしさも味わった。

※残念であったのは、サン・マルコ寺院から少し離れたピエタ教会（ヴィバルディが司祭を務め、孤児たちに音楽教育をした）に「四季」の演奏会掲示があったが、演奏開始が20時では、サンタ・ルチア駅までの約2kmの安全な帰りに確信が持てず、断念せざるを得なかったこと。

IV. 迷路への試み

食事中、まだ充分な時間があるので、サンタ・ルチア駅に戻る道を次のように決めた。リアルト橋を渡り、ベネチア共和国時代から存続しているような建物の込入った地区を通り抜ける。地区の通り抜けは直線距離で1kmの大きな迷路とも思われた。

実行はリアルト橋を渡ったところで進行予定方向に沿った路地を選んで始まった。観光客も多く、通りには屋台も並んでいた。混雑の中、屋台の果物などを買って食べたり、店内に入っ

て見て回ったりして雰囲気も楽しんだ。今までの幸運もあってか、たかが1kmの距離との思いもあってか、進行方向を気にせず相対的に人の多くいる方向を選んだ。

そのうち、人も店も少なくなった。建物は同じように2～5階建てで隙間なく連なり、路地はだんだん狭くなり複雑に曲がりだしたりもした。路地の交差場所で進行方向のことが気になりだした。そこで路幅や先の行止まりの有無などの確認と予測も取り入れ進路を選んだ。たま

に磁石も利用した。

お土産品を売る小さな店がぽつんとあったりすると、覗いたりした。

小さな広場に出た。ベンチに座り、経路を思い返し地図で現地点の確認を行なったが全く分からない。広場は2～5階の住居のような建物にびっしりと壁のように囲まれ、視界は真上の空だけである。数百年前の世界に取り残されたような感じがした。

完全に迷路に陥った。人は全く見当たらない。脱出方法考えた。そして次のことに思いついた。水路は必ず大運河に通じているから、水路に出会ったら沿って歩く、大運河に出れば開けた視界と前日の水上バスでの行き来で見た景色とから位置確認ができると。再び歩き出したら小さな水路が見えた。水路に沿って歩く道が無いところは、いったん離れても水路を確認できる位置を守りながら、水路に並行に進んだ。いつのまにか路地は道といえるものになり、低い独立した建物になっていた。個人宅への通路の先に大運河が見えた。そこへ行って見渡すとアカデミア橋が見えた。結局、リアルト橋からの歩いた方向は目標方向から大きく外れていた。大運河から離れないようにしてアカデミア橋に行った。それから先は地図を頼りに、島の南岸の埠頭に向かい、そこを歩き、ビジネス地域と思われる低くて小奇麗な建物と掘割のような水路のある地区を通してサンタ・ルチア駅に辿り着いた。

今、考えれば、試みはドン・キホーテが単騎で風車に突撃したようなものでもあった。

また、記述した不便や苦労を、現在はスマホで回避や解決ができる。だが、旅の未知からくる不便や苦労はワクワク感にも通じる。

※ストライキ余聞

ベネチア、ドロミテなどイタリア北東部を旅し、ミラノに戻った。宿で翌日の空模様を知るためテレビをつけた。ニュース番組で、明日アリタリア航空が部分ストライキを行うような内容があった。私たちの帰国便はアリタリア航空。イタリア語は全く分からないのでフロントに問い合わせたら、国内便の一部でストライキとの事であった。安心した。